

とにかく計算が苦手なので、この金額の三割っていくらですか？と聞かれて計算機で計算してもなぜか元金より多くなってしまいうくらい（どういうレベルの間違いをしているかすぐ伝わりませぬ）なので、お金のつきあいがうまかったとは決して言えない。

ただ、お金を粗末にしたことはないと思う。常に生活の実験や、安心や、自分や家族の命のために使ってきたように思う。

十年ほど前に、もうすぐ辞めるといいうバイトの男の子に、ギリシヤを見てほしくて、アシスタント補佐としてわざわざ来てもらったことがある。別に連れて行かなくてもよかったしお金はかかったけれど、彼を思い出すたびにギリシヤで思い切つて美容院に行き、めちゃくちゃかっこいいけれど再現が不可能な少年マンガみたいな髪型になって帰ってきたことを思い出す。

彼のそのチャレンジを見ることができて、よかったと思う。お金を惜しんでいたら得られなかった思い出だ。

私の母は、私にお金を要求するたびに「お金がない？ そんなはずはないじゃない。一度は長者番付に載ったのに！」と言っていたが、長者番付と言ったって一年だけで、しかも「作家の部」（それだけでも充分額は小さくなっていくのに）の末席であった。そのようなお金は税金としておおよそ七割くらいが去っていくので、私に残されたお金はローンで家が一軒買え



絵・江口修平

悔いのないあり方

吉本ばなな

るくらいのものであった。

そして信頼していた税理士さんに騙されて（杜仲茶の輸入の会社の連帯保証人になって、その会社がつぶれたということだった）、全く法的な効力のない借入書を用意され、わからずにお金を貸してしまい、大きなお金を失った。

このことが私にもたらしたのは、自分は決して連帯保証人にはならないと決めたことと、そのときのアシスタントが泣きながら、「私、お金を貸すところを見ていました。証人になれませ」と言ってくれたことの美しさだ。見てたからってどうしようもないのに、嬉しかった。

それから、私の父は死ぬ直前、ほとんど意識不明になりながら、「支払いのことで困ったら俺に言ってくれよ」とうわごとのように私に何回も言った。その病院から自分で支払いをして退院することは決してなかったのに。でもアシスタントの話と同じで、その言葉だけで心は大きな愛に包まれたように感じた。そう言ってくれる人を私は失うのだ、と思ったなら、怖くなかった。そしてこれまでのことを全てありがたく思った。

お金は諸刃の剣で、そういうわけで私も痛い目があったことがたくさんある。でも大切なのは、その剣を美しく使うことだ。自分の心にはそはつけない。

せめて手元に来てくれたお金をお客様のようにもてなして、大切に使い、手を汚すことなく悔いなく死んでいけたらと思う。

よしもと・ばなな●小説家。1964年、東京生まれ。日本大学藝術学部文芸学科卒業。87年『キッチン』で第6回海燕新人文学賞を受賞しデビュー。著作は30カ国以上で翻訳出版され国内外での受賞も多数。2022年『ミトンとふびん』で第58回谷崎潤一郎賞を受賞。近著に『はーばーらいと』など。



写真：Fumiya Sawa